

## 日本地球惑星科学連合一米国地球物理学連合同2017年大会 「最新の大気科学：海大陸研究強化年－YMC」セッションの報告

米 山 邦 夫\*・竹 見 哲 也\*\*

2017年度の日本地球惑星科学連合同大会は、表題通り米国地球物理学連合との合同会合となり、日本気象学会主催セッションとして、「最新の大気科学：海大陸研究強化年－YMC」(International Field Campaign－Years of the Maritime Continent－YMC)というテーマで、5月21日に開催した。合同会合に相応しく、2017年から2年間の予定で開始する国際プロジェクトYMCをテーマとし、コンピーナーは、米山邦夫、竹見哲也、Chidong Zhang (米国海洋大気庁・太平洋海洋環境研究所)が務めた。

YMCは、インドネシアを中心とする東部インド洋から西部太平洋にかけての海と陸(島)が混在する「海大陸」域の気象・気候現象に対する理解を観測と数値モデル実験により深め、さらには中・高緯度への影響についても理解することを目指したプロジェクトで、20ヶ国・地域から70以上の研究機関の参加が見込まれている。その観測キャンペーン期間は2017年7月から2年間となっており、タイミング的にも開始直前の情報交換の場として最適であった。口頭発表12件、ポスター発表13件のうち8件が豪州・中国・台湾・米国からであった。定員70名の会議室はほぼ満室で、途中の出入りもあったことから、総数はその数を十分超えていたと思われる(なお、セッション開始直後、締め切られた会議室のドア外側に前日同室を利用した際に用いたと思われる「関係者以外入室禁止」の貼り紙が見つかり、撤去する騒ぎがありました。この貼り紙のために、セッション聴講を遠慮された方が少なから

ずいらっしまったかもしれません。世話人としてこの場を借りてお詫び致します)。

発表25件は、「日変化やマッデン・ジュリアン振動などYMCで主研究対象となる現象に関する一般的な研究成果」と「2015年に予備観測としてスマトラ島西岸で行われたPre-YMCキャンペーンの解析・モデル研究や今後YMC期間中に実施予定の観測計画案の紹介などYMCプロジェクトに直接関係するもの」の発表に大別することができた。前者では、海面水温や熱の鉛直分布の重要性を指摘した発表が多く、言い換えればYMCにおける観測に対する示唆を与えるものであった。一方、後者ではコロラド州立大学のMaloney教授によるPISTON (Propagation of Intra-seasonal Tropical Oscillations) プロジェクトと台湾大学のSui教授による南シナ海での観測計画の紹介が招待講演として行われ、またPre-YMCに関しては、日変化の他、海洋構造や雷活動など種々のテーマの発表が行われた。

YMCはキャンペーンが始まったところであり、いよいよ観測が本格化し、データ蓄積とともに新たな成果が期待される。本セッションは今後も、その進捗に合わせて最新研究成果の交換の場として活用されていくことだろう。

最後に、本セッションを活発な情報交換の場として盛り上げた全発表者そして聴講者各位に感謝する。また準備に当たり、日本気象学会ならびに日本地球惑星科学連合の事務局から様々な形で支援を受けたことにも、謝意を表したい。ありがとうございました。

\* (連絡責任著者) Kunio YONEYAMA, 海洋研究開発機構。

yoneyamak@jamstec.go.jp

\*\* Tetsuya TAKEMI, 京都大学防災研究所。

© 2017 日本気象学会